

朝を ひらく

お盆が近づくとつれ、ちよつと心が憂鬱になる。お墓の苦情が、にわか雨のように降り注ぐからである。

「草をちゃんと取ってない」「隣の墓石が自分の敷地内に食い込んでる」

夏のこの時期、住職は頭の下げまくりである。4千基のお墓をお守りする寺の住職として仕方のないことかもしれないが、精神的にこたえる。クレーム処理は、ただ頭を下げていけばいいというものでもない。意識の中でしっかりと自らの過ちを認め、相手を受け入れなければよ

コーチャビリティ

永田 円了
真国寺住職



い結論には達しない。

でも、心の中では葛藤がある。「こんなことで、何で私が……」。還暦をすぎた住職のプライドがムクムクと頭をもたげる。養老孟司氏はこれを「バカの壁」と呼んだ。「中で出来上がってくる非常に堅いもの」。壁をつくってそこから外を見ないこと」

本当はこんなプライドなんか捨てて歩みたい。自らのバカの

壁を壊したい。昆虫や爬虫類は、殻を自らの力で破り、脱皮してより大きく成長する。いや脱皮できなければ中で死ぬことになる。人の意識は頑固なままでも生き続けられるから厄介である。この意味では、人間という生き物は過酷なまでに自由が与えられているのだろうか。

こんな堅い殻を壊し、心を軽く生きていく手立てはないのか。自問自答の中、こんなコトバに出くわした。コーチャビリティ (coachability) である。これはコーチをする能力なのか。いいえ、コーチを受ける能力のことである。教える力ではなく、教わる能力である。これまでの経験や知識でいっぱい

の頭の中のコップを空っぽにできる能力のことである。

人は年をとり、経験を積み重ねるほど自信満々の頑固さがはびこる。これを何とかしなければ、自らの殻の中で意識は壊死を起す。知らず知らずの間に。人の意識も本来、日常の中で成長の促しを受け続けていると思う。

ことが起こったとき、殻に安住した心は犯人捜しを始めるが、脱皮した心は、このウラに潜む真のメッセージを見つけ、そこから教わるうとする。意識の持ち方によって、かくも反応の仕方が変わる。人も昆虫のように自然の原理で殻を破ることができれば、心の成長は約束されるのであろうが、さて、どうすれば人も脱皮し続けることができるのか、住職も頭をかかえるこの夏。

心の脱皮続けるには